

【ポスターセッション】

ソーシャルワークアセスメントスキル研修プログラム開発

－「PSW 塾」の取り組み－

○ 日本福祉大学中央福祉専門学校 田中 和彦 (007020)

大谷 京子(日本福祉大学・002998)、寺澤 法弘(日本福祉大学・005898) 吉田 みゆき(同朋大学・004027)

キーワード3つ：アセスメントスキル、研修プログラム、PSW

1. 研究目的

ソーシャルワークにおけるアセスメントはソーシャルワーク実践の鍵、礎石とされ、クライアントとワーカー、そして周囲の状況を、ワーカーとクライアント双方が理解するための情報収集分析のプロセス（アセスメントプロセス）を通して、ワーカーとクライアントの協働的取り組みから目の前の現実を解釈し共有していくことが求められる。そのためのスキルを身に着けていくことがソーシャルワーク実践には欠かせない。

本研究に先立ち、ソーシャルワークアセスメントにおける先行研究レビュー(大谷：2013, 2014)、若手 PSW のアセスメントプロセスにおける困難性を明らかにした調査(田中：2014)、エキスパート PSW のアセスメントプロセスを明らかにした調査(田中ら：第 61 回日本社会福祉学会にて口頭発表)、エキスパート PSW のアセスメントスキルを明らかにした調査(大谷ら：第 31 回日本ソーシャルワーク学会にて口頭発表)をおこなった。それらの結果、アセスメントプロセスに必要なスキルとして、情報収集→仮説生成→仮説照合→仮説検証の繰り返しとその遂行のためのスキルを抽出した。ただし、そのスキルの言語化し習得可能なものとする、そのための獲得手段についてはいまだ明らかではない。

そこで本研究では、アセスメントに必要なスキルを獲得していくための研修プログラムの開発と試行についての取り組みを振り返り、スキル獲得における研修プログラム開発の成果と課題を明らかにする。

2. 研究の視点および方法

①アセスメントスキル伝達のための研修プログラムの枠組みを確立する。②各フェーズにおける理解度と行為としての達成度を把握する。③プログラムの課題を明らかにする。

研究方法としては、2014年5月～7月に開催した、アセスメントスキル向上のための研修プログラムをもとに、そのプログラムの試行状況について考察する。研修プログラムには、経験年数3年～7年のPSW14名が参加した。講師陣は全員PSWの実践経験をもち、現在は養成機関で精神保健福祉士・社会福祉士の養成教育に携わる4名である。プログラムは前半、後半とわけ、それぞれを3回ずつ(1回あたり3時間)とした。本報告では、前半のベースコースを中心に報告する。研修プログラムは、録音・録画・振り返りアンケートをおこない、研修プログラムの振り返りツールとして活用した。

3. 倫理的配慮

調査協力者には研究の趣旨を口頭及び文書で説明し、録音・録画データ、アンケートは研究以外の目的では使用しないこと、研究の成果は発表することを約束し、調査協力の承諾を得た。その他は日本社会福祉学会研究倫理指針に従った。

4. 研究結果

研修プログラムの枠組みとして、「既存のアセスメントツールにとらわれすぎたアセスメントスキルから自由になること」「体験的学習とレクチャーの組み合わせを通して、体験的かつ理論的にスキルを獲得する」「毎回宿題を課し、プログラムでの学びと現場実践とが往來するような工夫をする」という3点を重視した。そのことにより「協働する実践者」としてのPSWを目指すということを目的として共有している。ベースコースでは、アセスメントスキルにおける「仮説・検証プロセス」の習得を目的とし、アセスメントプロセスの方法の一つとして、「仮説・検証」の方法を段階的に身に着けることを目的とした。プログラムは以下の通りである。

	第1回	第2回	第3回
テーマ	枠組み外し	仮説生成プロセスの体験	仮説・検証プロセスの体験
プログラム	<ul style="list-style-type: none"> ・アセスメントに対する理解 ・アセスメント票を活用した場合としない場合のロールプレイ 	<ul style="list-style-type: none"> ・仮説生成のための気づきのワーク ・仮説生成プロセスについての理解 ・仮説生成の視覚化 ・検証のための問いかけ 	<ul style="list-style-type: none"> ・仮説・検証プロセスの位置づけと方法の理解 ・仮説生成プロセスの取り組み ・面接のテーマ決定 ・実際のロールプレイと仮説・検証

5. 考察

受講者の振り返りアンケートの分析からも、おおむね研修の評価は高い。しかし、実際のワークでの取り組みや、講師の主観的印象として明確な手ごたえを感じられていないのも現実である。その要因として、①内容は理解できるものの、実際にやってみると難しい、②理論を実践に落とし込む際の橋渡しができていない、③活用する用語の意味が不明瞭であり方向性が共有されていない、ことが考えられる。アセスメントスキルとしての仮説・検証プロセスは、いわば現場のソーシャルワーカーが頭の中でやっていることを可視化したものである。共有できる事項としての言語化が必要であり、プログラムのブラッシュアップが求められる。さらには、受講者が研修を踏まえてできているかどうか、というスキルアップを評価する尺度の開発も今後の課題となる。